

〈論 文〉

歴史学習の意義・意味を考えさせる社会科授業の創造

——「今井」と「富田林」における寺内町の比較を通して——

中 谷 昇

要旨：「なぜ、歴史を学ぶ必要があるのか」という問いに対して、これまで社会科教師は明確に生徒に説明する術を持たず、受験のために必要であるとする知識を生徒に詰め込み、ひたすら暗記させるだけの社会科授業をしてきたのではなかろうか。このような現場の状況を憂い、近年、社会科教育系の学会では「レリバンス」という概念が取れ入れられ、それに基づいた社会科授業実践が報告されている。しかし、この一連の研究動向は「子どもの切実性」を重視するあまり「はいまわる経験主義」と揶揄された初期社会科に戻ることを良しとしているわけではなく、社会諸科学の研究成果に基づいた探究過程を重視しつつ、生徒に「歴史学習の意義・意味」を考えさせることを主眼に置いている。

そこで、今回は歴史地理学の研究成果に学びつつ、奈良の「今井」と大阪の「富田林」の2つの寺内町を題材として取り上げ、景観・成立過程・本願寺流通経路・織田信長との関係性等を通して2つの寺内町の相違点を明らかにするとともに、寺内町という教材を通して過去と現在をつなぎ、生徒に歴史学習の意義・意味を考えさせる機会としたい。

今回、社会科授業モデルの第4時においてパフォーマンス課題を設定し、2度の価値判断を生徒に行わせるという授業構成を試みることで、現行の学習指導要領解説（社会編）に基づく社会科授業を乗り越える社会科授業モデルの提案をしたいと考える。

は じ め に

1975年の文化財保護法の改正にともない、全国にある歴史的な集落・町並みの保存が叫ばれるようになり、文化庁が我が国にとって特に価値が高いと判断した歴史的保存地区を「重要伝統的建造物群保存地区⁽¹⁾」（以下、重伝建）として選定している。2023年12月15日現在で127地区が指定を受け、国主導のもと都道府県・市町村による保存活動が進んでいる。

近畿地方を概観すると、代表的な重伝建として、滋賀県近江八幡市八幡の商家町や大津市坂本の門前町、京都府伊根町伊根浦の舟屋群、兵庫県では神戸市北野町山本通の港町、和歌山県湯浅町湯浅の醸造町、奈良県橿原市今井や大阪府富田林市富田林の寺内町等が挙げられる。

国土交通省国土技術政策研究所発行の国総研究資料第723号「歴史まちづくりの手引き（案）」⁽²⁾の「歴史まちづくりの特性の見方・読み方」で

は、重伝建を①城下町、②在郷町、③門前町、④宿場町、⑤港町、⑥寺内町の6形態に区分している。社会科教育の授業レベルで考えた場合、①～⑤は地域の特性として教材化し易く多数の実践が見られるものの、⑥については「浄土真宗」という特定の宗教が関係することもあるが、これまで実践事例はさほど見られない。

また、寺内町そのものが中世末期に成立しているにもかかわらず、度重なる戦乱・火災・開発等によって寺内町の景観が消滅・変容し、当時の景観が現存しておらず、生徒にとっては当時のようすをイメージしにくいということも教材化を阻む要因の一つになっている。実際、現存している寺内町の景観のほとんどが近世以降の江戸・明治時代に復元されており、これまで寺内町研究者や社会科教師も積極的に教材化に踏み込めなかったのも事実である。

本年度より新しい高等学校学習指導要領解説（地理歴史編）・高等学校学習指導要領解説（公民

編)⁽³⁾に基づく教科書による授業が開始され、その中で文部科学省は、「社会的見方・考え方」や「児童・生徒の日々の生活との関連」を大切にしている授業を進めるよう学校現場に働きかけている。また、去る2月17日に行われた社会系教科教育学会（兵庫教育大学）でもシンポジウムのテーマが「社会系教科教育カリキュラムにおけるレリバンス構築のあり方」⁽⁴⁾となっており、社会科教育学研究者・現場教員間でも積極的な意見交流が行われた。そういう点から考えても、今や社会科学学習においてレリバンス⁽⁵⁾が喫緊のテーマであることは明らかで、現場の社会科教師は毎時間社会科授業の中でレリバンスと向き合わなくてはならないことになろう。

このような昨今の社会科教育研究の情勢下にあって、富田林・今井の寺内町を社会科教材として取り上げることは大きな意義・意味がある。2つの寺内町は江戸時代の復元であるにもかかわらず、寺内町建設当初の中世末期の景観を色濃く残す貴重な重伝建であり、景観のみならず、織田信長の全国統一にとっていかに本願寺ネットワークが弊害となっていたかを究明する上でも興味深い資料が多く存在する。

そこで、今回は2つの典型的な寺内町を比較しつつ、宗教都市でありながら、経済力・自衛力を保持していた富田林・今井寺内町を社会科授業モデルに落とし込み、生徒のレリバンス構築に役立てたいと考える。

1. 社会科教育で歴史を学ぶ意義・意味

(1) 社会科教育におけるレリバンス

社会科教師は地理・公民の授業に比べ、歴史の授業を苦手に行っているのではないだろうか。それは対象である生徒が、社会科（歴史）の学習内容を現在の自分たちの生活と結び付けることができず、歴史を学ぶ意味・意義をあまり感じていないところに原因がある。また、そのような対象生徒を目の前にしている社会科教師は、得てして以下の①～③のようなことを述べていることが多い。

① 社会科は暗記しなくてはならない歴史用語が多すぎて、生徒には面白味がない。

② 現代に生きる生徒の「ものさし」で歴史的

事象を判断できない。

③ 子どもが歴史を学ぶ意義や意味が見い出せない。（下線は筆者）

以前は「歴史は丸暗記しなくてはいけないから嫌」という声が多数を占めていたが、現在は上記下線部のように、「歴史学習をする意義・意味がわからない」という声が次第に増加し、残念ながら社会科授業が生徒たちの現実の生活と乖離しているのが現状である。したがって、学習指導要領の指針が大きく変更されたこの機会に、われわれ社会科教師は歴史の授業方法を見直さねばならない時期に来ている。

社会科教師は、従来から学校現場ではありがちだった「講義形式の社会科授業」、「知識網羅型の社会科授業」、「トーク&チョークの社会科授業」、「プリント穴埋め型の社会科授業」、「見開き2ページ1時間完結型の社会科授業」から脱却しなくてはならない。かといって、筆者はコロナ禍になってにわかに急増した「パワーポイント提示型の社会科授業」や「タブレットを使用したドリル型社会科授業」を社会科授業改善の良策と考えているわけでもない。

歴史を学ぶ意味・意義を見い出せない生徒に、社会科教師は過去と現在をつなぐ橋渡しをする役割を果たし、生徒に切実性をもって社会科授業に取り組む姿勢を持たせることが求められているのである。

ただ、ここで確認しておきたいことは、筆者は戦後すぐに社会科が導入された際に全国に広がった「経験主義社会科」⁽⁶⁾の復活を求めているわけでもない。教師が子どもが求める切実性に寄り過ぎて、科学的探究の過程を踏まえない、いわゆる「はいまわる社会科」になることを危惧しているからである。

筆者は30年にわたり中学校の現場で社会科授業を行ってきた。現場の教壇に立っていた頃、生徒から歴史授業の際に「先生、歴史なんか勉強して、何か意味あるの?」と何度も聞かれたことがある。その際、決まって以下のように答えていたように思う。

「歴史的な事象を学ぶことは大切である。な

ぜなら、現代社会では人々がいくら知恵を絞っても解決できない様々な問題が起きている。その問題は今突然沸き起こったわけではなく、歴史のいずれかの時点で発生したものである。

したがって、その原因を探ったり、当時の人々がどのように対処してきたかを学ぶことが必ず現在の諸問題を解決する手掛かりとなるはずである。また、歴史を学ぶことにより現代の課題や諸矛盾を解決し、よりよい未来を創造していくことが我々の役割であり、それが歴史を学ぶ意義・意味と言える。」(下線は筆者)

古代史研究者の平川南は新視点古代史「日本の原像」の「はじめに」で、歴史を学ぶ必要性について、以下のように述べている⁽⁷⁾。

「いま、なぜ歴史学か。日本の現状と未来への展望を注視したとき、今日ほど歴史を学ぶことの大切さを感じることはないのではないか。現代の日本が抱えているさまざまな政治的・社会的・精神的な問題を考え直すためには、日本の歴史を知る必要がある。」(下線部は筆者)

歴史授業を改革する意味合いもあり、筆者は以前より過去と現在をつなぐ歴史授業の開発に取り組んできた。過去と現在をつなぐ方法はいくつか考えられる。古文書、遺物・遺跡、伝承、建造物等を取り上げ、それらの史資料を通して現在とつなぐ方法である。

生徒にとって学習が定着し易い方法が何かと考えた場合、やはり自らの体験によるものが大きく、実物資料に触れたり、現地に足を運ぶことは生徒の歴史イメージを拡大することにつながる。小学校の社会科学学習で実物教材を用いたり、ゲストティーチャーを招聘したり、社会見学に出向いたりするのは、書物等で見るのと実際見学・体験に行くのとでは知識として残る量に雲泥の差があるからである。

したがって、生徒のみならず、社会科教師につ

いても現地に足を運ぶことが重要である。その点について、岩田一彦は社会科授業研究の理論の中で、以下のように述べている⁽⁸⁾。

「自分の『常識』をこわし、新しい知識を身につけるには、『事実』に体当たりすることが一番である。」

そこで、筆者はどのようにすれば生徒が歴史をイメージしやすく、生徒の現実の生活と結びつけることが可能かを考えてみた。その過程で、景観の復元・復原に意味を見出している歴史地理学の知見を活かし、富田林・今井の2つの寺内町を取り上げ、絵図・景観、立地、形成過程、本願寺との関係性等を比較した社会科授業を開発し、提案することが有効ではないかと考えた。

現在、歴史教育の研究者間で「歴史レリバンス」という概念がよく使用されている。「レリバンス」とは「優位性・関連性」という意味で、子どもが「なぜ歴史を学ぶの？」という問いに答える歴史を学習する意義・意味に関する研究が進められているところである。

成蹊大学の二井正浩は「歴史リバレンス」について、以下のように述べている⁽⁹⁾。

「本来、レリバンス(relevance)とは関連性・意義という意味であり、ここでは、子どもにとっての学びの意味や意義を表す概念として用いている。日本の歴史教育には、子どもにとってのレリバンス、近年よく使われる言葉で言えば、『自分事』としての学びが必要だ。」

(中略) 歴史教育の構造を子ども自身の文脈や子どもの生きている社会とどう関連付けるのかという問題である。(下線は筆者)」

高等学校では学習指導要領が大きく変わり、新しく地理探究・歴史探究という科目が設定され、地理総合・歴史総合で学んだ地理的、歴史的見方・考え方を土台に探究学習を進めるよう構成されている。これまでの学習指導要領と異なり、従来までの分離した小・中・高のカリキュラムを改

善し、一貫した系統性のある社会科教育カリキュラムを目指そうとしたことは、評価に値する。また、そこに通底しているのは「社会的見方・考え方」であり、高等学校地理歴史科・公民科の学習指導要領にも色濃く反映されている。

新設の歴史総合という科目では、これまでのように古代から現代までの歴史を通史として学習せず、小・中学校での社会的見方・考え方の学習を踏まえ、近現代史を通して歴史の見方・考え方を学び、その後歴史探究につなげていくという流れになっている。したがって、学習指導要領の改革にともなって作成された教科書内容の大幅変更により、現場の高等学校の先生方は当惑しており、本年度は地理歴史科授業の中で試行錯誤を繰り返しながら、新しい歴史総合の授業の方向性を模索しているところである。

筆者は昨今の情勢を受け、まずは専門である中学校歴史的分野における学習の改善に取り組み、将来的に地理歴史科での授業開発を進めたいと考える。子どもが歴史学習を学ぶ意義・意味を体感できる社会科授業をめざすとともに、過去と現在をつなぎ、子どもが実感をもって歴史授業を捉えられる教材を発掘し、それに基づいた社会科授業モデルを開発し、提案する。

(2)「歴史地理学」から見た寺内町

「歴史地理調査ハンドブック」編集委員会では、その著書の中で他の学問とは異なる歴史地理学の優位性について、以下のように述べている⁽¹⁰⁾。

「(前略)したがって、歴史地理学は、過去の地表現象の研究を通じて、現代・過去の別なく、地表それ自体や地表に展開する諸現象の本質の理解に寄与することをも重要な目的としているのである。

換言すれば、歴史地理学の研究成果は、歴史研究のみでなく、地理学にも換言されなければならない。この意味において、研究が「過去の解明」に収斂される他の歴史系諸分野と本質的に異なる側面を有しているのである。(下線部はともに筆者)

歴史学習と地理学習を結びつけることにより、子ども達を過去と現在をつなぐ学習に誘うことができる。その橋渡しとなる学問が歴史地理学である。歴史地理学の研究者である藤岡謙二郎は、地理学と歴史地理学の研究領域に触れて、以下のよう

に述べている⁽¹¹⁾。

「地理学の主たる対象は地表の現在の景観である。歴史地理学研究の領域においてさえ、この対象は現在その土地地域に何等かの形で印象づけられて残存しているものでなければならないのである。

寺内町の場合われわれはこれを歴史学の対象としてだけでなく歴史地理学の対象としても充分取り上げることが出来る。すなわち、各地の現在の景観の中に右の歴史性が印象づけられているのである。」(下線部は筆者)

社会科教育学は社会諸科学の研究成果を生かした学問である。したがって、今回は歴史地理学の知見を活かしつつ、歴史教育の研究対象を大阪府の「富田林」と奈良県の「今井」という2つの寺内町とする。その理由の一つは、両者とも現在でも丁寧に町並みを保存しており、中世の寺内町成立期の景観をよく残しているからである。もう一つは、石山合戦(石山本願寺と織田信長の戦争)の際に、富田林は織田信長に味方した寺内町として、今井は本願寺と協力し織田信長に敵対した寺内町として知られているというところである。

したがって、対照的な2つの寺内町を絵図・景観・古文書等で比較・分析することにより、中世における寺内町の役割が浮き彫りにされるものと考ええる。

また、全国各地の浄土真宗が普及している地域には今でも寺内町の名残が多くあり、生徒も自ら訪れ、体験できるという利点もある。そして、何よりも大切なのは、歴史を学ぶ意義・意味を体感できる教材であるということである。

以下の写真1～写真6は、今でも中世の面影の残る今井・富田林の寺内町の景観を表している。いずれの寺内町も、現在寺内町を軸としたまちづくりに力を入れ、観光客を呼び寄せる取組を進め



写真1 今井寺内町



写真2 あて曲げ



写真3 駒つなぎ

写真1～6は筆者撮影



写真5 富田林寺内町②



写真4 富田林寺内町①



写真6 興正寺別院

ている。

2. 寺内町の研究

寺内町研究は、社会学、歴史学、文献史学、考古学、民俗学、宗教学、建築学、地理学等の学問分野において、一向一揆研究、都市史、建築史、城郭史等を中心にさまざまな研究が試みられてきた。寺内町研究を大まかに分類すると、①「由緒書」⁽¹²⁾の史料批判、②形態的類型研究、③「大阪並」体制論の研究、の3つになる。本研究では、近年研究者間では客観性がないとして文献としての資料価値が低いとされる①を除き、基本的には②・③の研究視点からのアプローチを中心に研究を進めることとした。

(1) 寺内町の形態的類型研究

北陸・東海・畿内を中心に、全国には数多くの寺内町が存在する。その代表的なものとして、河内富田林、和泉貝塚、近江山田、同寺内、越中古府、同井波、同城端、河内久宝寺、同八尾寺内、摂津天満、大和今井、越前の吉崎、山城山科本願寺、摂津石山本願寺、等が挙げられる（下線・太字は筆者）。主として浄土真宗本願寺派の道場・

表1 富田林と今井の比較

	富田林寺内町	今井寺内町
成立時期	1560年（永禄3年）	1532～1555年（天文年間）
寺院	興正寺	称年寺
差配	證秀上人に協力した「八人衆」	今井兵部（在地土豪・一向坊主）
立地	大和川に合流する石川の左岸に立地し、堺から奈良御所へ至る富田林街道と東高野街道との交差点にあたって、やはり水陸交通上の要地。	東西に走る横大路沿いにあたり、奈良から南へ縦貫する中街道に近接し、飛鳥川と高取川に挟まれた低地に成立した。
防衛	・南北6筋、東西7町の道路で整然と区画 ・竹藪のある土居を巡らす出入りは4カ所に限定 ・下水道を完備・あて曲げ・用心堀	・四方八方に堀を巡らし、土手を築き町割をしている。 ・道路を屈折させる（見通しを悪くする） ・土手に竹及び雑木を植える・9つの門を構える
呼び名	・唯一の「大阪並」体制が実施されたまち	・大和の金は今井に七分・海の堺、陸の今井
人口	261軒・約1600人～2000人	1100軒・4000人が居住
商人	酒造、米屋、布屋、紺屋、鍛冶屋、樽屋、油屋、大工	肥料商、質屋、古物商、造り酒屋、材木商、木綿業、両替商、米屋、味噌屋、油屋
範囲	東西南北とも約350m	東西600m・南北310m
流通通貨		今井札（銀札）[関東でも通用していた]
特徴	虫籠窓、忍返し、厨子、駒つなぎ	天窓、厨子、家紋、駒つなぎ
重要文化財	旧杉山家住宅、興正寺別院本堂 他6件	今西家住宅、豊田家住宅、称年寺本堂 他6件
文献資料	富田林寺内町絵図（7鋪一括）河内名所図会 16世紀末ごろの富田林寺内町の景観図 （イラスト 中西立太、週刊朝日百科「日本の歴史6」）	明智光秀今井郷惣中宛書状（橿原市指定文化財） 織田信長今井郷惣中宛赦免状（橿原市指定文化財） 今井古絵図

寺院を中核とした宗教都市のことを指し、戦国大名との対立や他宗派との抗争の關係で石山本願寺が主導して畿内各地に意図的に建設した経緯がある。したがって、宗教都市でありながら、ことのほか自衛に力点を置いたまちづくりになっていることが窺える。

歴史地理学の研究者たちは「富田林と今井の寺内町景観が近世から明治にかけて成立したものである」とし、中世に建設された寺内町の意義を軽視して研究対象として除外してきた経緯もあり、これまで寺内町の景観を軸とした形態的研究に踏み込んでこなかった。しかしながら、近畿地方には数多くの寺内町景観が現存しており、中世の寺内町景観の特徴が色濃く残されている表1の富田林と今井は研究する意義があるものと考ええる。

奈良県橿原市今井町称年寺に現存している「明智光秀今井郷惣中宛書状」⁽¹³⁾では、今井寺内町の特徴を以下のように述べている。

表2 明智光秀今井郷惣中宛書状

- | |
|---|
| <p>一 外側惣構土居、藪堀之儀、町代に申渡、毎度吟味仕候得共、猥ニ罷成、不用心ニ御座候ニ付、五年以前卯年、杉半右衛門様江奉窺、惣年寄罷出、吟味出、土居藪之内外二垣結じ、其上町代共相廻シ、度々吟味仕候故、只今ニ至、余程茂リ申候(略)</p> <p>一 町中惣講九口門之儀、暮れ六ツより指明、六ツニ開キ申候、右之内、<u>東西南北四口ハ相改</u>、出入致させ申候、相残ル五口ハ夜中一切出入不仕候(略)</p> <p>(下線はいずれも筆者)</p> |
|---|

また、寺内町の実研究者である鍛代敏雄は寺内町を以下のように定義づけている⁽¹⁴⁾。

「寺内町とは、寺院を核として、その境内地を名目に、『寺内』領域を設定し、周囲に環濠や土塁をめぐらして町屋を抱え込んだ都市、または都市的聚落である。」(下線は筆者)

今井寺内町に限らず、浄土真宗の寺院を核としてつくられた寺内町は、諸公事特権を守るために立地を考えたり、防御のために周囲を堀で囲んだり、敵の侵入を防ぐといったさまざまな手だてを講じている。寺内町に見られる景観の共通的特徴

として、以下の6点が挙げられる。そのうち、①～⑥の特徴を満たしているのが、富田林と今井だけであり、この2つを比較・研究することにより寺内町の全貌が解き明かされるものと考ええる。

- ① 町割が基盤目形直交状をなし真宗の寺院を寺内にもっている
- ② 周囲に環濠或いは土手をめぐらしそこに藪などが植え付けられている
- ③ 四周に門をもっている(木戸番の設置)
- ④ 計画的な都市プランは、ほぼ同時代に並行して作られる近世在郷町の原初形態
- ⑤ 有力土豪・大名の寄進・門徒化によって成立した
- ⑥ 門徒集団による買得並びに一定区域の占拠によって成立したもの

(2) 寺内町の地理的・歴史的成立条件

鍛代敏雄は寺内町の地理的・歴史的成立条件について言及しており、歴史的成立条件については文献資料が僅少であることや在郷町への展開が不明確であることなどから、立地の歴史的特質をほとんど明らかにしていない。一方、寺内町の地理的条件については、河川交通の利便性を十分認識した都市建設であるとしつつ、以下のように述べている⁽¹⁵⁾。

「石山を基点に大和川と淀川の二大水系に沿って門徒が分布し、その水脈を利用できる位置に寺内町が建設されていた。東高野街道、河内街道、大坂と奈良を結ぶ奈良街道を基軸としていたことがわかった。」

寺内町の形態的類型研究について言及している金井年および鍛代の主張を整理すると、次項の表3・表4のとおりである⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾。

寺内町の成立は①寺内町の建設が始まる15世紀後半、②山科本願寺が消失して石山へ本願寺が移転した1530年代、③石山本願寺が信長の力に降伏して大坂の地を去る1580年代の3つの時期に限られており、浄土真宗主導によるまちづくりが16世紀に進められていたことが分かる。

表3 寺内町立地の地理的条件

寺内町	寺内町立地の地理的条件
石 山	旧大和川・淀川，湾岸の水上交通の要衝
富 田	女瀬川－芥川－淀川の河川交通，京と西宮市を結ぶ西国街道の支道，高槻街道沿い
枚 方	淀川の港津で，淀川左岸の京街道が河内街道に連結し，河内街道・磐船か移動の起点にあって，なお東高野街道に近接していた水陸交通の拠点。
久宝寺	長瀬川の中流左岸にあり，その河川は寝屋川水系から大和川の支流平野川の分岐点。陸路は南北に縦貫する東高野街道に近接。
富田林	大和川に合流する石川の左岸に立地し，堺から奈良御所へ至る富田林街道と東高野街道との交差点にあたって，やはり水陸交通上の要地。
今 井	東西に走る横大路沿いにあたり，奈良から南へ縦貫する中街道に近接し，飛鳥川と高取川に挟まれた低地に成立した。

表4 寺内町の地理的条件

町の地形的地立条件			条里制と社会的立地との関係		町の社会的立地条件
台地・丘陵上	吉崎，金沢大 阪石山	大 防 御 性 小	条里完全依存型	・大和高田	真宗が盛んな地域かつ経済の先進地域
河岸段丘上	富田林		部分的踏襲型	・久宝寺 ・一身田 ・今井	交通の要所
自然堤防上	久宝寺， 八尾，萱振		中間型	・富田林	比較的豊かな水田地域
低湿地	今井，大和， 高田，御所				

3. 本願寺ネットワークによる流通支配

(1) 本願寺教団の交通網と寺内商人の活動

辻井清吾は，寺内町が真宗寺院を中核とした宗教的性格は強いことは認めつつも，石山本願寺と寺内町を結ぶ本願寺ネットワークに経済的意義があるとして，寺内町を「地域経済センター」⁽¹⁸⁾と称して注目している。

また，鍛代によれば，石山本願寺は，本願寺流通経路の安全を保障するために，さまざまな策を講じていたとし，以下のように述べている⁽¹⁹⁾。

「交通路を直接支配する地域領主には礼銭・礼物を贈り，路次の安全保障を依頼していた。(中略) 関所対策に関しては，関所へ礼銭を納入し勘過の安全を保証させ，主要な関所へは，通行税を一括して納めて，勘過の円滑化を図っていた。

石山本願寺は，水上交通において，多くの船を所有し，水運業者や水夫を抱える一方，陸上交通においても馬借等を抱え，門徒衆が路地の安全を保障するとともに，物資の輸送を一点引き受けていたと思われる。(中略)石山寺内に今井の業者が居住し，廻船業者とつながっていた。」(下線は筆者)

石山本願寺は流通経路の安全保障を請け負うために，水上・陸上輸送業者として宗門に関係なく「ワタリ」⁽²⁰⁾を雇い，本願寺ネットワークの維持に努めていたのである。

石山本願寺は度重なる織田信長からの様々な要求に耐えかね，織田信長との戦闘を想定し，各地の一向一揆を扇動しつつ，畿内寺内町を武装化させていく。石山本願寺にとっては自前の本願寺ネットワークの維持のために，さまざまな手段を講じるわけであるが，石山本願寺の意向とは異なる

り、畿内の寺内町のほとんどが織田信長を恐れ、石山本願寺の呼びかけに呼応しないことになってしまうのである。

堀新によると、石山合戦の対応を巡って畿内寺内町の対応が異なったことについて、北陸の一向一揆と比較して、以下のように述べている⁽²¹⁾。

「畿内の場合、本願寺の勢力はいまだ点（寺内町）と線（流通路）にとどまっており、北陸のように面（農村）にまで十分に展開していなかったことにその限界があったのではないか。」

一方、畿内寺内町の今井の武装化について、橋詰 茂は以下のように述べている⁽²²⁾。

「真宗道場の建設は、重要交通路であった下つ道と横大路の交差する札の辻に近いところから、商人層を逸早く居住させ、商業が営まれ南大和における経済中心地となすものであった。また、早くから居住した商人層だけでなく、『方々ヨリ人ヲ集メ、家ヲラセ』と門徒召集をしての形成であった本願寺権力の介入によって都市城塞化され、反本願寺権力に対応する寺内町として形づくられた。

『ワタリ』流入による流通機構の所持、手工業者集団の存在がクローズアップされる。彼らと以前より居住する商人層によって構成され、本願寺経済の一端を担うものであり、本願寺権力＝今井兵部による支配体制下に編成されるものであった。」（下線は筆者）

織田信長が目指した天下統一事業にとって石山本願寺を中心とした本願寺ネットワークはきわめて邪魔なものであり、本願寺ネットワークの分断により、経済的基盤を崩壊させようという意図があったと考えられる。

辻井は、畿内における本願寺の経済力の大きさについて、以下のように述べている⁽²³⁾。

「寺内町のような内部に楽市・楽座的な

『場』を多く創出した教団は、本願寺派において他にない。当時本願寺は多くの船を所有し、港湾整備を行い水運業者や水夫を抱えていた。枚方、堺、鳥羽に廻船し、陸路運輸では、各地の門徒衆が警固した。商業体制を生み出し、教団の商人観・商業倫理・有徳思想等の宗教心が、都市共同体の中で共有されていたと思われる。」（下線は筆者）

商人等の物資の流通は畿内では基本的に本願寺ネットワークによってなされており、門徒衆によって交通路の路次の安全保障がなされていたというわけである。

（2）今井寺内町の構造

藤木久志は織田信長の天下統一事業完成には本願寺ネットワークを崩壊させることが不可欠であったという論考を掲載し、戦国期の寺内町に共通する点について、以下のように述べている⁽²⁴⁾。

「戦国期を通じて進行する、『渡り』の非農業民（金掘り・金屋・鍛冶・研屋・油屋・漁民・水運業などの人びと）の土地および富の獲得と定住化（山から里へ、海から河口へ）の過程があった」

由緒書の1つである大和軍記⁽²⁵⁾にも、「町割ヲ致シ、方々ヨリ呼ビ集メ、家ヲ作ラセ、國中ヘノ商等ヲイタサセ」という文章が見られ、大和の今井をはじめ畿内の寺内町には職人・商人が多く居住し（写真7・写真8）、本願寺ネットワークを維持するための重要な役割を果たしていたことが読み取れる。

今井には、称念寺という浄土真宗の寺院があり、そこに所蔵されている検地帳をもとに橋詰が今井の経済力を確認するために、表5「屋号登録人数」、表6「職業別構成表」としてまとめている。

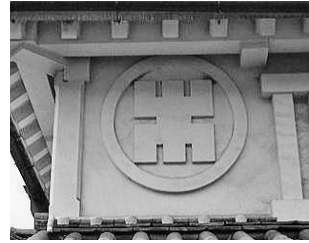
当時の「文禄4年検地帳」⁽²⁶⁾によると、屋敷筆数は522筆、内、登録人255名で、そのうち、2筆以上所有者が112名（44%）、10筆以上4名（全体の8.2%の土地を所有）となっている。中

表5 屋号登録人表

屋号	屋敷地 筆数	登録町名	土地面積 (畝歩)
地蔵屋	3	南・新・ 岡今	7.21
スミヤ	1	岡今	4.02
カギヤ	1	今	4.06
餅屋	1	南	3.28
高瀬屋	2	北(?)	3.15
油屋	1	北	3.1
妙法寺屋	1	岡今	3.02
新堂屋	1	東	3
秋田屋	1	北	2.07半
カタヅカヤ	1	今	2.01
悪銭屋	1	新	1.26
タチハナヤ	1	新	1.25
ナウテヤ	1	新	1.25
マンチウヤ	1	南	1.22
シミツヤ	1	新	1.2
木屋	1	南	1.2
上橋屋	1	東	1.15
番屋	3	南・西・ 北	0.27
わくや	1	新	0.26
カベヅリ	1	北	0.25
後屋	1	南	0.24
計	26		52.17半

表6 職業別構成表

職人	人数	商人・不明	人数
か事屋	3	西てうや	3
こんや	2	木や	3
大工	2	松や	2
筆や	2	むらのや	1
あめや	1	しりかいや	1
うさや	1	おかや	1
わくや	1	しんかや	1
さやや	1	大ごや	1
しほや	1	土蔵や	1
かミヤ	1	うしろい	1
すミヤ	1	ずしや	1
ほそいとや	1	かわしや	1
川さきり	1	土ほしや	1
かこや	1	ぢわうや	1
つほや	1	ふうや	1
つるや	1	八國町	1
久ほかじや	1		
ぬしや	1		
計	23	計	21

写真8 豊田家 家紋
写真7, 8は筆者撮影

には、甚四郎という人物のように12筆以上所有している者もある。また、屋敷数2筆以上もつ112名の者の家持が72.6%の屋敷を所持しており、屋敷地も寺内町の各地に分散している。

表5「屋号登録人数」を概観すると、今井が経済的に力を持っており、さまざまな職業の人たちが混在していたことがうかがえる。特に、スミヤ、カギヤ、油屋、悪銭屋、木屋、カベヅリ等の屋号が散見され、その職業は大体予想がつく。織豊期すでに現在の橿原市四条では大和木綿の栽培が行われており、それに従事する商人も存在し、今井の柳屋は米穀の取引を頻繁に行っており、奈良－吉野間で大規模な米穀取引に関わっていたようで、「大和の金は今井に七分」・「海の堺、陸の今井」という言葉が残されているところからも、今井は畿内における本願寺ネットワークの中核を担っていたものと思われる。

今井寺内町が本願寺ネットワークの中核的役割を果たしていた点について、橋詰は以下のように分析している⁽²⁷⁾。



写真7 駒つなぎ

「今井の米商人は奈良から吉野へと広範囲にわたって相当規模な米の取引を行っていたことが知れるが、彼らは問屋の商人と見ることができよう。真宗の拠点地である吉野と、大坂を結ぶ大動脈の中心が今井であった。大坂より吉野へ赴く本願寺衆が、たびたび今井に立ち寄り宿泊していることがこれを裏付ける。今井の商人が奈良から吉野にかけて大規模な米の取引を行っていることは、本願寺流通米を取扱う商人といえよう。つまり本願寺経済流通路の一端を担っていたのであり、その拠点が今井であった。(下線は筆者)

一方、表6「職業別構成表」を概観すると、か事屋、こんや、ほそいとやなどの名が見える。か事屋は農具の普及にともない鍛冶屋の必要性が増したこと、こんや・ほそいとやはこの地域が大和木綿の産地であったことから、この職業の人々が多く住んでいたことがうかがえる。したがって、職人が多く居住していたとされる富田林とは異なり、農業・工業ともに今井は大和・畿内の拠点となっていたことをうかがわせる。

(3)「大坂並」体制と大坂同前

戦国時代に各地に群雄割拠していた戦国大名を滅ぼし、天下統一の基礎を築いたのは文字通り織田信長にほかならない。ただ、尾張の弱小大名だった織田信長には天下統一に向けて超えるべき高いハードルがいくつもあり、その1つが石山本願寺制圧であったのである。それは、ある意味上杉謙信・武田信玄・浅井長政・今川義元といった名だたる戦国大名を制圧するより困難だったと推測される。

戦国大名が領国ごとに分国法を制定し、政治・経済の安定や財源確保・人心掌握に力を入れたのと同様、石山本願寺を頂点とした畿内に広がる本願寺ネットワークは当時の国際都市である堺をしのぐものであり、宗教と流通を同時に支配するとつともなく大きな経済圏であった。したがって、織田信長にとっては畿内寺内町の結束を分断・再編するために楽市・楽座令を浸透させ、織田信長の支配下に寺内町を組み込むことこそが、天下統一の早道だったというわけである。結果的に石山合戦は10年間続くが、この戦いが単なる古い伝統的な宗教勢力である浄土真宗の撲滅のみにあるのではないことを確認しておきたい。

では、なぜ石山本願寺がそのような力を持ち得たのであろう。石山本願寺が獲得した寺内町特権（諸公事免許・徳政免許）は畿内各地の寺内町に波及した。この体制を「大坂並」体制と呼ぶ。橋詰はこの点について、以下のように述べている⁽²⁸⁾。

「永禄三、四年河内富田林道場にあてた河内畠山・三好氏の政令に『大坂並』の文言が銘記されている。一向宗の道場にあてた文書である以上、『大坂』が石山本願寺を指し、『寺中之儀、何も可為大坂並』『大坂並二諸公事免許』の条項が、いわば本山並特権の保証を意味する。中央の大坂寺内から地方諸寺内へ、おそらく層位制を伴いつつ、おしおよばされる寺内特権の保証体制を大坂並体制といい、石山本願寺の広域的な都市・流通路支配を支え、法王の権威支配を補強する重大な政治的・経済的な基礎であった。（以下略）」（下線は筆者）

大坂の富田林は織田信長に早々に屈服しているにもかかわらず、この「大坂並」体制の典型である寺内町が富田林であると言われている。一方、石山本願寺に呼応し織田信長に敵対した大和の今井は「大坂同前」と位置付けられている。その点について橋詰は、以下のように述べている⁽²⁹⁾。

「寺内町今井の武装都市化を破却させ、郷

民の土民化、いわゆる一向一揆拠点地の解体、農民の都市との分離こそ、まさしく寺内特権を認めつつもこれ以前の体制を否定しようとしたものであろう。つまり、「大坂同前」とは、諸役免許、徳政適用の除外、商業を保護しつつも、石山本願寺の広域的な都市流通支配を否定し、織田政権下への吸収・都市流通路支配・商業体制再編成をめざしたものにほかならない。」（下線は筆者）

石山本願寺にとっては織田信長と戦う上において、畿内各地の寺内町を結ぶ流通経路は何よりも大切であり、その途上に位置する大和の今井の役割は重要であったと推察できる。したがって、石山本願寺の介入により次第に都市城塞化されていたものと考ええる。

一方、織田信長にとっては、石山本願寺の「大坂並」体制を解体・再編成することが畿内を制圧することになり、そのために畿内寺内町に圧力をかけ札銭の要求をしている。堀は藤木仁志・峰岸純夫の論考を取り上げて、以下のように述べている⁽³⁰⁾。

「本願寺が石山において獲得した寺内町特権（諸公事免許・徳政免許）が各地の寺内町に波及した体制（＝「大坂並」体制）を、楽市楽座令によって解体・再編成することによって、織田権力統一政権になりえたというのである。」

表7 御制札

当寺内御制札 ⁽³¹⁾ 在之条、不可有異儀候、押而何ヶ 与申族於有之者、可有成敗者也 永禄十一年十月朔日

富田林をはじめ、畿内寺内町のほとんどが織田信長との戦闘を回避し札銭要求に答えているのに対し、今井は当初石山本願寺の呼びかけに呼応し織田信長と対立している。そのことによって、信長の家臣である明智光秀に攻められ、降伏している経緯がある。降伏の際、今井の要求に答える形で信長が寺内町の安全を保障する制札を発給した

と考えられる。この信長制札＝「御制札」をうける形で、織田氏奉行人が寺内町の安全を保障したのが前項の表7である。

さて、今井は「大坂同前」、富田林は「大坂並」体制と位置付けられているが、実際のところはどうであろう。織田信長に屈服した今井は、「大坂同前」という安堵をもらったものの、実態としては「宗門相統」のみの安堵であったことは間違いないところであろう。織田信長は上洛時に、石山本願寺にも礼金を要求し、石山本願寺は5000貫の礼金を差し出している。また、畿内の寺院・寺内町にも礼金を要求し、これを拒否したものを破却・焼き打ちにしている。富田林は織田権力による破却を恐れて礼金を差し出す一方、今井は拒否したことから明智光秀に攻められている。

結局のところ、富田林は「大坂並」体制の典型であると言われるものの、実態としては織田信長の攻撃を恐れ屈服したため、信長が単に「寺内町の安全を保障」したに過ぎず、本来的な意味での「大坂並」の寺内町特権を安堵したものではない。したがって、織田信長は楽市・楽座令を推し進めることによって、本願寺ネットワークの分断を図り、天下統一事業へと邁進しようとしたのである。

4. 寺内町の知識構造

(1) 中学校学習指導要領解説（社会編）への位置付け

現行の「中学校学習指導要領解説社会編」歴史的分野の目標（1）では、社会科学習で身に付ける技能について、以下のように書かれている。

「(1) 我が国の歴史の大きな流れを、世界の歴史を背景に、各時代の特色を踏まえて理解するとともに、諸資料から歴史に関する様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。」（下線は筆者）

さらに、(1)の下線部のねらいとして、以下のように述べている。

「歴史的分野の学習において、これらの情

報は主に様々な資料を通して収集される。歴史的分野の学習に用いられる資料には、文献や絵図、地図、統計など歴史学習に関わる様々な性格の資料や、作業的で具体的な体験を伴う学習によって得られる幅広い資料が存在する。その中から、必要な資料を選択して有効に活用することで、社会的事象を一面的に捉えるのではなく、様々な角度から捉えることができるのである。」⁽³²⁾（下線は筆者）

すでにこれまでも述べてきたように、生徒の日常生活にあまり接点がないと考えられる歴史学習において、寺内町という教材を通じて過去と現在をつなぐ役割を「歴史レリバンズ」に見出すことができるのではないだろうか。

また、歴史的分野の場合、生徒のもつであろう固定観念をひっくり返す意味合いからも、寺内町を取り上げる効果が以下の諸点からも分かる。

- ① 今井寺内町と富田林寺内町の共通点・相違点から、寺内町のもつ特質について学ぶことができる。
- ② 浄土真宗が本願寺ネットワークを用いて、畿内で強大な経済圏を保持していたことを学ぶことができる。
- ③ 織田信長の石山本願寺制圧は、天下統一事業にとって必須の政策であったことに気付くことができる。
- ④ 石山本願寺の意向により、重伝建の中でも、寺内町は特異なまちづくりを経ていることに気付くことができる。
- ⑤ 復元された寺内町からも、設立当初の様子をイメージすることができる。

そこで、寺内町を教材化するにあたり、寺内町の先行研究を進め、中学生にでも教材が身近に感じられ、かつ、容易に理解できる内容にするため、35項表10「寺内町の構造」として整理した。この知識内容を第1時～第4時からなる社会科授業モデルとして開発した。

特に前述の⑤については、異論のある研究者・社会科教員も多いのではないだろうか。当時の景

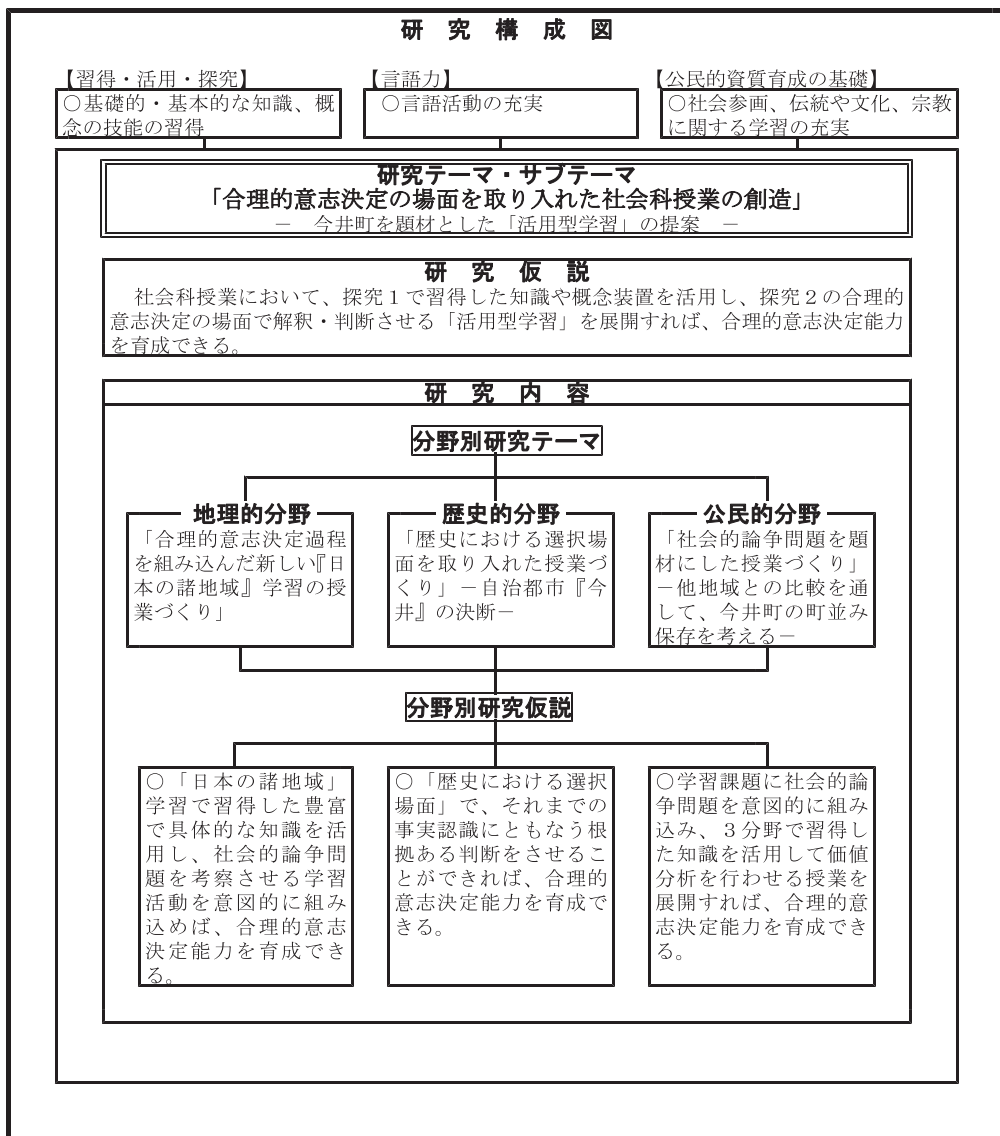
観を復元した寺内町に歴史的価値があるか否かという問題である。「歴史まちづくりの一環」として観光的要素が強かったり、政治的要請であったりすることも多く、議論の分かれるところである。しかしながら、今井・富田林はできるかぎり忠実に中世の建設当初の景観を再現するよう努力がなされており、単なる観光客誘致や安直なまちづくりというわけでもないことがわかる。

今回、教材化するにあたって、絵図・地図・町

屋・寺内景観写真などをふんだんに使用し、生徒が当時の歴史にタイムスリップできるよう工夫を施しているのも特徴の1つである。

2009年の近畿大会・奈良大会では研究テーマとの整合性を図るため研究内容を「今井町」とし、各部会での成果や課題を3部会で共有した。また、授業方法論として岩田一彦⁽³³⁾が提唱する「合理的意志決定」を採用し、いずれの部会でも社会認識形成を図る概念探究過程の後、価値分析

表8 第15回近畿中学校社会科教育研究大会 奈良大会研究構成図⁽³⁴⁾



過程の中で（自分だったらどうするか）を判断させる「合理的意志決定」の手法を取り入れた。

したがって、研究会としては前頁表8にあるように、あくまで「合理的意志決定」を研究テーマにしていたこともあり、正直なところ内容研究において歴史地理学に軸足を置いた寺内町の研究成果を組み込んだ研究発表にはなり得ていなかったと考える。

また、この研究は2009年に近畿中学校社会科教育研究大会を奈良で行うにあたり、「寺内町である今井を3分野で斬る」を合言葉に研究大会を主導した際筆者の基調提案をベースにしていることでもあり、当時参観者から「現在に生きる生徒が当時の今井寺内町住民の立場には立てない」というご批判の声を真摯に受けとめ、改善を図っている点にも着目していただきたい。

2009年の近畿大会で丹後七重教諭が実践発表した内容をもとに、当時の歴史的分野の学習指導案に筆者が加筆・修正を加えた。丹後の学習指導過程は寺内町の景観に主眼を置いていたが、筆者の学習過程は「本願寺ネットワーク」に主眼を置いているのが大きな特徴である。なお、丹後と筆者の学習過程の違いを整理すると以下の表9のとおりである。

さて、社会科授業モデル作成にあたっては「概念探究型社会科」の学習過程の手順を踏み、今井・富田林の「寺内町」の学習を通して、畿内一円の寺内町の様子も把握できるよう心がけた。この授業モデルでは、第1時～第3時の学習過程を経て、第4時で生徒自らが価値判断をする形態を採用している。つまり、第3時までで学習した内容をもとに、自らの学習過程をメタ認知し、「自分だったらどうするか」という歴史的な判断を求めているのが特徴である。

「歴史的評価」については、研究者・授業者の間でも議論が多くなされている。その多くが「過去のできごとについて、現在を生きている生徒が評価できるのか」という問題である。それについては、小原友行が過去の論考で述べていることから、近畿・奈良大会でも歴史部会において採用している経緯がある⁽³⁵⁾。

とかく、歴史上の人物に対する共感的理解や業績をもとに評価する傾向にあると思われるが、現在に生きる生徒たちが評価するためには、歴史上の人物たちの政策・判断に対して客観的に評価するものさしが必要となる。

表9 丹後七重と筆者の学習過程（第1時～第4時）の比較

	丹後七重の学習過程	筆者の学習過程
第1時	今井の絵図から町ごと武装化している寺内町の特徴を読み取るとともに、同じ寺内町である富田林と比較・考察し、城塞都市としての共通点を把握する。	今井・富田林の絵図・景観を切り口に、寺内町が城塞化した理由を、地理的・社会的条件（地形・交通・産業・宗教等）から仮説を立て検証する。
第2時	「下剋上」という状況を如実に表したものとして加賀の一向一揆を取り上げ、門徒衆の成長が石山本願寺と織田信長の対立へと発展していくことに着目する。	興福寺の影響力の低下に目を付けた石山本願寺が大和の今井を寺内町として武装化させ、浄土真宗の勢力を拡大した点について着目する。
第3時	「海の堺」・「陸の今井」と言われるように、寺内町がすべて主要街道沿いの陸上交通の拠点や大和川・淀川の二大水系に沿って水上交通の拠点や河口部といった交通の要衝に建設されている点を古地図や絵図から読み解く。	富田林を拠点にした本願寺ネットワークという経済圏が存在し、宗教勢力である石山本願寺が畿内各地の寺内町を城塞化し、浄土真宗の経済基盤を戦国大名に奪われないように手を尽くしていた点に着目する。
第4時	歴史の選択場面を意図的に設定し、第1時～第3時で習得した知識を活用し、2つの選択場面において根拠を示して自分の意見を述べさせるとともに、結果（史実）をふまえ、自らの決断と今井の決断を比較・考察し、今井の決断を評価する。	第1時～第3時で習得した知識を活用し、歴史の選択場面で2度のパフォーマンス課題に取り組み、根拠を示して自分の意見を記述させ、結果（史実）をふまえ、自らの決断と今井の決断（史実）を比較・考察し、今井の決断を評価する。

表 10 第4時のパフォーマンス課題

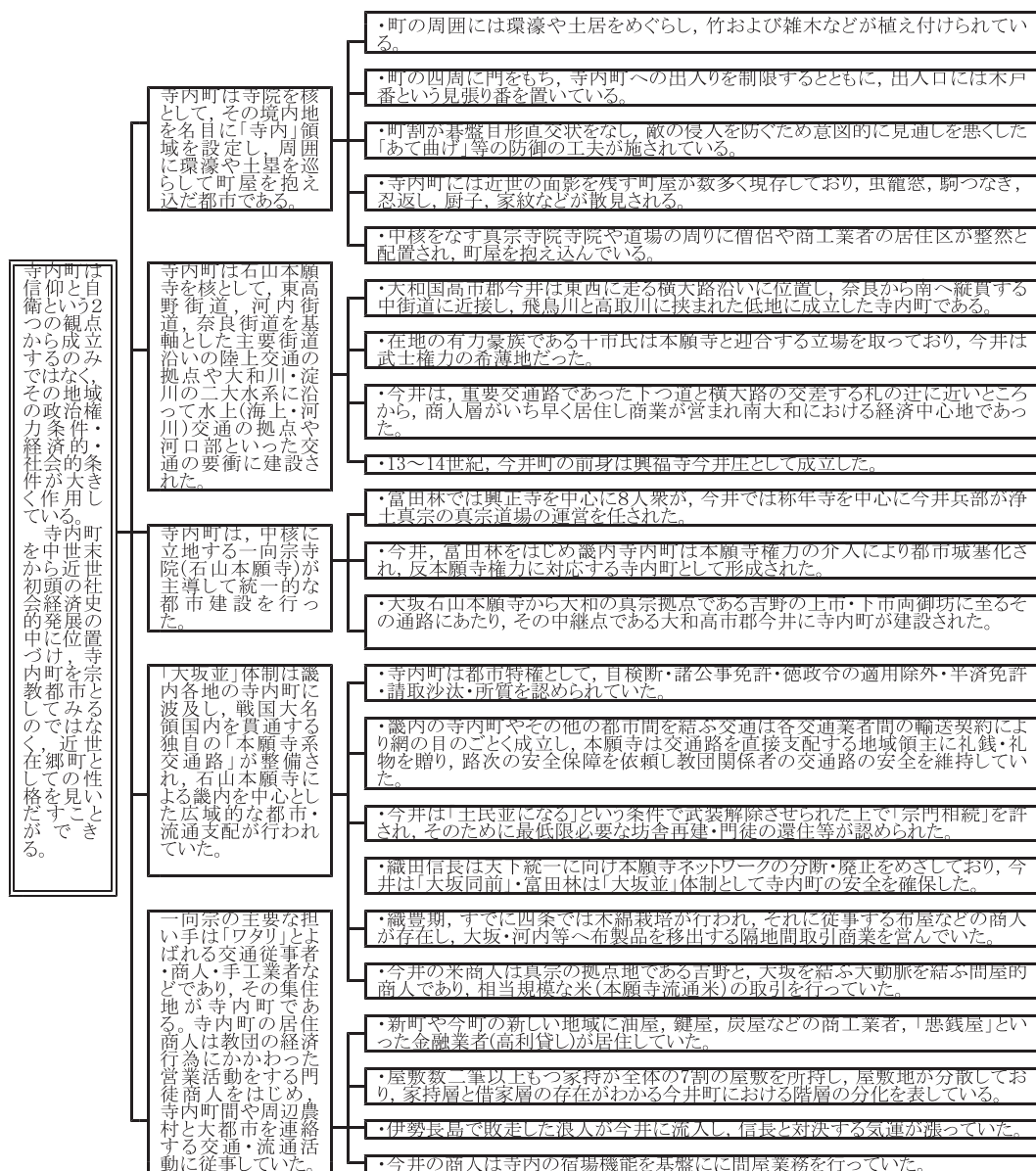
パフォーマンス課題①

あなたは今井寺内町に居住している商人です。ある日、突然織田信長が今井に使者を派遣してきて、今井に対して石山本願寺と一緒に行動せず、信長に従うようにという命令が下りました。あなたは石山本願寺と協力して織田信長と戦うか、それとも信長に従うか、第1時～第3時で習得した知識をもとにして、自分の考えをレポートにまとめてみましょう。



パフォーマンス課題②

あなたは今井寺内町に居住している商人です。ある日、織田信長の家臣の明智光秀がやってきて、今井に対していくつかの降伏条件を示した上で、降伏勧告を突きつけました。あなたは、この降伏勧告に賛同しますか、それとも断固拒否しますか。信長から示された条件内容を使いながら自分の考えを説明しましょう。(いずれも下線は筆者)

表 11 寺内町の知識構造⁽³⁷⁾

(2) 歴史的分野でのパフォーマンス評価⁽³⁶⁾

生徒が歴史学習を人ごとではなく自分事として捉えるためには、生徒に歴史のある時点に立たせて思考させることが求められる。その際に、有効な手法がパフォーマンス評価である。

近年、社会科教育研究者たちが中心となってパフォーマンス課題を学習指導案に明示した授業開発を進めている。これまで、社会科教師は歴史新聞やレポート等を課題として与えても、事前に評価基準を示さず、提出後に A・B・C といった評価をしていた。言わば「後出しじゃんけん」であり、生徒の側からすると評価の基準が見えないまま、とりあえず一般的にレベルの高い内容が求められるという不合理なものであった。

こういった現状を打開するためには、事前に教師が評価の基準を示すパフォーマンス評価は有効である。ただ、評価の観点と評価の尺度を一覧表に可視化したルーブリックを作成しなくてはならず、評価者による評価の偏りはなくなるものの、

慣れるまではルーブリックの作成に多くの時間を費やすことになる。また、学力の高い生徒が教師の評価基準に合わせたレポートを出すようになったり、学力の低い生徒がパフォーマンス課題に対応できないで苦勞することにもなる。

そこで、今回はそのような状況を改善する 1 つの手法として、第 1 時～第 3 時で習得した知識を第 4 時で活用することにした。また、2 段階のパフォーマンス課題を設定し、生徒が習得した知識を生かしているかどうか見極める工夫をした。

5. 中学校社会科授業モデル⁽³⁸⁾

(1) 学習計画（全 4 時間）

- 第 1 時 地理的・社会的条件から寺内町を考える
 第 2 時 宗教から寺内町を考える
 第 3 時 本願寺ネットワーク
 第 4 時 今井の決断

(2) 単元の評価基準と学習過程（全 4 時）

単 元	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に向かう態度
【第 1 時】 「地理的・社会的条件」から今井を考える	○絵図から「環濠」・「土居」・「入り組んだ道」といった寺内町による自衛の特色を読み取る技能を身に付けている。	○今井と富田林の絵図を比較し、寺内町が「自衛を意識した町づくり」という点で共通していることを読み取り、表現している。	○歴史的な町並みが残されている今井・富田林に関心を持ち、その歴史的背景をとらえようとしている。
【第 2 時】 「宗教」から今井を考える	○一向宗という宗教のつながりで人々が団結し、自分たちの利益保持や要求実現のため、一揆を起こすまでに民衆の力が成長したことを理解している。	○門徒衆は、寺内町を中心に自分たちの利益保持や要求実現のために団結を深め、一向一揆を起こし、やがて一国を支配するまでに成長する過程を考察し、表現している。	○興福寺の強い勢力下である大和にあって、一向宗が今井を真宗拠点にしようとしたという当時の社会的背景に関心を持とうとしている。
【第 3 時】 本願寺ネットワーク	○「大坂並」体制は畿内各地の寺内町に急速に浸透し、石山本願寺による畿内を中心とした広域的都市・流通支配が行われていたことを理解している。	○寺内町の分布から、寺内町が主要街道沿いや大和川・淀川の二大水系沿い及び河口部の水陸交通の要衝に建設されたという共通点を読み取り、表現している。	
【第 4 時】 今井の決断		○石山合戦の際、今井が織田信長に対して下した決断について、第 3 時までの学習を活用して、歴史的評価をしている。	○下剋上の風潮の下、戦国大名に立ち向かっていく「自治都市・今井」の決断に関心を持ち、主体的に歴史的事象について考えようとしている。

第1時 地理的・社会的条件から寺内町を考える

過程	学習活動	○主な発問 △主な呼びかけ	予想される 生徒の反応	指導上の留意点	資 料
概念探究過程Ⅰ①	・ 景観写真に関心を持つ。	△3枚の写真は奈良県のどこだろう。	・ 今井町（寺内町） ・ 伊根町（舟屋群） ・ 神戸市（港町）	・ 3枚の写真の共通点について考えさせる。	①景観写真（3枚）
	・ どの地域も昔の町並みを残している点を確認する。	△3枚の写真の共通点を探してみよう。	・ 同じ色調の建物 ・ 道幅が狭い。 ・ 町並みが古そう。	・ 3枚の写真とも「重要伝統的建造物群」であることを確認させる。	②「歴史まちづくり」
	【単元を貫く問い】 なぜ、今井・富田林の寺内町は宗教都市でありながら、まち全体を防衛していたのだろう。 富田林・今井などの寺内町はどのような地理的・社会的条件のところに建設されたのだろう。				
概念探究過程Ⅰ②	・ 寺内町が自衛を意識した町づくりであった点について確認する。	○「今井」の古絵図を見て、気付いたことを発表してみよう。	・ 9つの門（出入口）がある。 ・ 町割りをしている ・ 道を屈折させている。 ・ 町の周囲には堀や土居をめぐらしている。 ・ 土手に竹や雑木を植えている。	・ 自衛のために寺内町にさまざまな工夫をしていた点に気付かせる。 ・ 自衛としての環濠と大和平野の生活用水・排水との両立を考えていた点に着目させる。	③今井古絵図
	・ 今井と富田林の寺内町を比較し、双方とも町ごと装化している「寺内町」であることを確認する。 ・ 基本的な防衛態勢が似通っている点に着目する。	・ 「富田林復元図」を見て、気付いたことを発表しよう。 ・ 「武家造」の絵図を見て、防御の工夫を拾い上げよう。	・ 堀や土居がある。 ・ 周囲に竹藪がある ・ 出入り口が4つ ・ 近くに川がある。 ・ 吉野ヶ里遺跡 ・ 唐古・鍵遺跡	・ 今井寺内町と「武士の館」を比較し、自衛のために工夫している共通点を見つけさせる。 ・ 「武家屋敷」の学習と連動して考えさせる。	④富田林復元図 ⑤一遍上人絵伝
概念探究過程Ⅰ②	・ 畿内寺内町の立地条件について考えよう。	・ どのような条件がそろっているところに寺内町をは建設したのだろう。	・ 守りやすいところ ・ 交通の要衝 ・ 米作地帯 ・ 浄土真宗が盛ん	・ 鎌倉幕府の立地条件を想起しつつ、寺内町の建設理由を考えさせる。	⑥鎌倉幕府（想像図）
	・ 立地条件①（地形） ・ 立地条件②（交通） ・ 立地条件③（米作地帯） ・ 立地条件④（真宗道場） ・ 立地条件⑤（商業の中心地）	・ どのような地形のところに建設したのだろう。 ・ どのような交通条件が必要だったのだろう。 ・ 近隣にどのような作物を栽培していることが求められたのだろう。 ・ 何宗の寺院の協力が必要だったのだろう。 ・ 寺内町に重要文化財である町屋が多く残っている理由を考えてみよう。	・ 台地・丘陵地 ・ 河岸段丘 ・ 自然堤防・低湿地 ・ 街道沿い ・ 水運の利用が可能 ・ 労働力が確保できる地域 ・ 米 ・ 綿花 ・ 浄土真宗 ・ 商業が盛んだった ・ 畿内寺内町の中心だった	・ 自然の地形を利用して自衛することを目的にしていたことに気付かせる。 ・ 石山本願寺や他の真宗が盛んな地域と密接に結び付くことが必要であった点に気付かせる。 ・ 真宗地域に米を輸送することで利益を得ていたことに気付かせる。 ・ 浄土真宗と結び付くことにより、寺内町としての今井はさまざまな恩恵をもたらしていたことに気付かせる。	⑦富田林絵図（復元図） ⑧「八木札の辻」（写真） ⑨「文禄4年検地帳」 ⑩石山本願寺（文書？） ⑪旧杉山家住宅（パンフレット）
○寺内町は、中核に立地する一向宗寺院が主導し、陸上輸送に便利な街道沿いにつくられ、その境内地を名目に「寺内」領域を設定し、自衛しやすいように台地や河岸段丘を利用したり、周囲に環濠や土塁をめぐらしたりして町屋を抱え込み、石山本願寺の介入により都市域塞化され、統一的な町割りがつくられた。					

第2時 宗教から寺内町を考える

過程	学習活動	○主な発問 ◇主な呼びかけ	予想される生徒の反応	指導上の留意点	資 料
概念探究過程Ⅱ	・寺内町形成過程は異なっても真宗寺院が寺内の中核となっていることを知る。 ・現在の今井の寺院数を確認する。	◇寺内町には中心となる真宗寺院があることを確認しよう。 ◇今井寺内町にある寺院の名称を答えよう。	・称年寺（今井） ・興正寺（富田林） ・願泉寺（貝塚） ・称念寺 ・西光寺 ・順明寺 ・一向宗 ・日蓮宗	・寺内町はいずれも、今井と同様の防衛態勢を取っていることに気付かせる。 ・称念寺の位置を再確認させる。	⑫願泉寺（貝塚）町割図 ⑬今井町周辺絵図
	・一向宗以外の寺院もあることを想起する。 ・門徒衆が称念寺を核とした寺内形成を求めたことを認識する。	◇今井の称念寺は何宗の寺院だったかな。 ◇誰が今井に寺院を建設したのだろう。	・今井兵部 ・石山本願寺 ・今井住民	・寺内町形成にはさまざまな形態があることを理解させる。 ・報恩講をもとに一向宗の宗教的な団結力を理解させる。	⑭大和軍記 ⑮報恩講
	・一向宗の特徴を確認する。	○一向宗とはどんな宗教だろう。	・親鸞・本願寺・報恩講 ・悪人正機説	・一向宗の特徴を把握させる。	⑯加賀の一向一揆
	なぜ、石山本願寺は畿内各地に寺内町を建設したのだろう。				
	・一向宗を普及させるために、大坂と吉野を結ぶ中心地として今井が適していたことを理解する。 ・奈良でも一向一揆が起っていたことを確認する ・世の中で門徒衆の力が強くなってきたことを把握する。	○なぜ、門徒衆は寺内町として今井を選んだのだろう。 ◇今井でも「天文一揆」が起こったんだよ。 ○一向一揆の後、人々の生活はどうなったのだろう。	・今井は大坂石山本願寺・吉野の上市・下市両御坊の中継点だった。 ・在地の有力豪族である十市氏は本願寺と手を結んでいた。 ・奈良でも起こったのは意外だ。 ・守護大名を滅した。 ・諸公事免許や適用除外という都市特権が認められていた。 ・自治を強めた。	・一向宗普及の拠点 ・興福寺の影響力の少ない地域 【権力のエアポケット】 ・興福寺に対して起こした一揆であることを把握させる。 ・「自治」、「下剋上」の意味を考えさせるとともに、「大坂並」体制（石山本願寺並み経済的特権）が急速に広がったことを把握させる。	⑰近鉄路線図 ⑱天文一揆 ⑲流通経路図
○石山本願寺は織田信長との対立は避けられないと考え、寺内町の門徒衆を中心にして団結を深め、自分たちの利益の保持や要求実現のため、一向一揆という形で対抗勢力に対して各地で実力行使を行った。それゆえに人々の団結力はよりはる増し、今井は経済的特権を認められるほど発展した。					

第3時 本願寺ネットワーク

過程	学習活動	○主な発問 ◇主な呼びかけ	予想される生徒の反応	指導上の留意点	資 料
概念探究過程Ⅲ	・今井は富田林とは異なり、近世の町並みがほぼ保存されていることを知る。	◇現在の今井町の景観を見て、気付くことを発表してみよう。	・商家が多い。 ・昔ながらの古い町並みが窺える。 ・整然とした町割り	・今井の景観が保存されてきた経緯にも簡単に触れておく。	⑳今井町の景観写真
	・商家が多く集まっていること、「駒つなぎ」・家紋から、今井が繁栄していたことを知る。	◇駒つなぎは何に使われていたのだろう。 ◇今井に見られるこの印は何を表しているのだろう。	・商人にお金を借りに来た武士が馬をつないでいた。 ・今井町・一向宗 ・本願寺・商家	・今井は本願寺ネットワークの流通拠点であることから、商工業者が多く集住し、商業が発達していたことを理解させる。	㉑駒つなぎ ㉒家紋

概念探究過程Ⅲ	・今井は重要交通路であった下つ道と横大路の交差する札の辻に近く、商人層がいち早く居住し始め、商業が営まれていたことを理解する。	○「海の堺」・「陸の今井」とはどういう意味だろう。	・「海の堺」 → 海運で栄えた都市 ・「陸の今井」 → 街道沿いに発達した都市	・堺と並ぶ日本を代表する商業都市であったことを把握させる。	㉓堺の古地図・復元図
	なぜ、今井は本願寺ネットワークの拠点として繁栄したのだろう。				
	・寺内町立地の共通点を想起する。	○今井以外の寺内町はどのような所に立地しているのだろう。	・大和川・淀川の流域に多い。 ・東高野街道、河内街道、奈良街道を基軸とした主要街道沿いに多い。	・寺内町は淀川河口に立地する石山本願寺を拠点に、交通上の拠点を軸に形成されていることを読み取らせる。	㉔寺内町分布
	・今井ではどのような商業が発達していたかを読み取る。	○今井ではどんな商売が盛んだったのだろう。	・油屋・鍵屋・炭屋・布屋・米屋・宿屋・悪銭屋	・今井では、中世末に木綿栽培がすでに盛んで、大阪との取引が頻繁に行われていた。	㉕文禄検地帳「屋号人数表」 ㉖文禄検地帳「職業別構成表」
	・寺内町に交通路の安全保障を依頼する商人が多かった点を確認する。	○武士でもない商人がどのようにして通行の安全を保持したのだろう。	・交通路を直接支配する地域領主に礼銭・礼物を贈っていた。	・今井が「本願寺流通米」の取引を行う重要拠点であった。 ・武士がたびたび資金借りに来ていた。 ・一向宗関係者の宿坊としての役割を果たしていた。	
説明的知識の習得	○寺内町は主要街道沿いの陸上交通の拠点や大和川・淀川の二大水系に沿って水上交通の拠点や河口部といった交通の要衝に建設され、「大坂並」体制（本願寺並特権）を獲得し、商業として繁栄をきわめていた。本願寺による広域的な都市・流通支配の下、戦国大名領国内を貫通する独自の「本願寺系交通路」が整備し、寺内町間の交通は、各交通業者（ワタリ）・商工業者間の契約によってネットワーク化されていた。				
	○寺内町は、「大坂並」体制の下、石山本願寺による広域的な都市・流通支配下にあり、中核に立地する一向宗寺院が主導し、都市城塞化された統一的な町割りをもっている。また、その地域特有の政治権力・経済的・社会的条件が寺内町の自治に大きく影響を及ぼし、寺内町固有の独自性も保持していた。さらに、「ワタリ」とよばれる輸送業者や商工業者などが寺内町の主要な担い手として活躍し、寺内町の繁栄を支える原動力となっていた。				

6. 本時（第4時）の指導

(1) 本時の題材「今井の決断」

(2) 本時の目標

- 下剋上の風潮の中で戦国大名に立ち向かっていく「今井寺内町」の決断に関心を持ち、主

(3) 本時の授業仮説

体的に歴史的事象について考えようとしている。(主体的な学習態度)

- 石山合戦の際、今井が織田信長に対して下した決断について、第3時までの学習を活用して、歴史的評価をしている。(思考・判断・表現)

第1時では、本願寺権力の介入により都市城塞化された統一的な町割りとしての寺内町、第2時では、門徒衆が自分たちの利益の保持や要求実現のため、一向一揆を起こした団結力、第3時では、石山本願寺による広域的な都市・流通支配『「大坂並」体制』について学習させる。

第4時では、石山合戦における「織田信長と戦うか否か」の選択場面でパフォーマンス課題①を提示し、今井寺内町がこれまでに習得した知識を活用して考えさせる。その上で、史実をふまえ、「自分なら信長の降伏勧告を受け入れるか否か」というパフォーマンス課題②を提示し、信長の降伏条件をもとに「自分ならどのような決断をするか」考えさせる。そして、自らの決断と当時の今井の人々の決断を比較・考察し、「今井の人々の判断は正しかったか」について歴史的評価を下し、人々によって歴史的事象に対するさまざまな見方があることを生徒に理解させることにより、意思決定能力を育成する。

第4時 今井の決断

過程	学習活動	○おもな発問 ◇おもな呼びかけ	予想される生徒の反応	指導上の留意点	資 料	
価値分析過程Ⅰ①	・石山合戦が勃発した経緯を確認する。	○石山本願寺が織田信長と戦う決意をしたのはなぜだろう。	・織田信長は古い宗教勢力が嫌いだった。 ・軍資金を要求された。	・織田信長の要求が石山本願寺にとっては無理難題ばかりであったことを捉えさせる。	②パフォーマンス課題① ・第1時～第3時までの資料 ⑧大坂本願寺勢力図	
	なぜ、富田林と異なり、今井は織田信長と敵対したのだろう。					
	・自分ならどうするか意見を述べる。 【選択場面①】 ・自分なりの根拠を持ち、選択した理由を述べる。 【説明する】 ・全国の寺内町の対応を確認する。 【史実を知る】 ・本願寺ネットワークを確認する。	○石山本願寺の参戦の呼びかけに対し、あなたが今井の住民ならどう決断をしたらだろう。 ○3つの立場に立って、その理由を考え、発言しよう。 ◇実際、今井はどう決断したのだろう。 ◇石山本願寺に対し、全国の門徒衆にどのような支援をしたのだろう。	①同意する ②同意しない ③中立 ①石山本願寺と共に信長と対決した ・防御機能が万全である。 ・一向一揆の実績がある。 ・経済力がある。 ②信長に降伏する ・信長には到底勝てない。 ③中立を守る ・真宗寺内町という立場から協力したいが、信長には反抗できない。 ・今井から人員が動員されている。 ・全国的に本願寺の味方をする	・史実を伏せて、自分の立場を確定させる。 →第1時で習得した知識「寺内町の防御力」 →第2時で習得した知識「一向宗の団結力」 →第3時で習得した知識「本願寺ネットワーク」 小学校で習得した知識「信長のイメージ」 →第2時で習得した知識「一向宗の団結力」 小学校で習得した知識「信長のイメージ」 ・自分の決断と史実との違いを比較させる。 ・石山本願寺が織田信長と対抗するほどの勢力を保持していたことを確認させる。		

・自分なりの根拠を持ち、選択した理由を述べる。 【選択場面②】	○信長が降伏勧告してきたが、みなさんが今井の住民ならどう対応するか。 「本願寺ネットワークの結びつき」・「当時の社会的背景」	① 断る ・守りは固めているから対抗できる・門徒として団結して戦うのだから、今井が全滅するまで断固として戦う。 ・反抗していない寺内町に挙兵を促がす。 ・武器購入や武士の雇用も可能だ。 ・全国から支援があるので、負けない ② 受け入れる ・勝つのは無理 ・金を渡せば今井の意向を信長は受け入れるはずだ。 ③ どちらでもない ・信長に服従したくないし、町を全滅させたくもない	→第1時で習得した知識 「寺内町の防衛力」 →第2時で習得した知識 「一向宗の団結力」 →第2時で習得した知識 「一向宗の団結力」 →第3時で習得した知識 「本願寺ネットワーク」 →小学校で習得した知識 「信長のイメージ」 →本時で習得した知識 「石山合戦の経緯」 →第1時～第3時で習得した知識 →本時で習得した知識	②9パフォーマンス課題② ・これまで使用した資料・ノート・ワークシート
② ・信長の降伏勧告に対する今井の決断を知る。 【史実を知る】 ・石山合戦の結果を確認する。 【史実を知る】 ・信長が今井を巧みに利用しようとした点に着目する。 【解釈する】	◇実際の今井の決断を確認しよう。 ◇各寺内町が下した決断の結果を確認しよう。 ○なぜ今井は信長に反抗したにもかかわらず、降伏勧告してもらったのだろう。	・今井は信長に支配され、自治権を失ってしまった。 ・町には大きな被害がなくてよかった。 ・団結力は意外と低く、門徒衆はバラバラだった。 ・伊勢長島→焼き払われる ・富田林→保護される「大阪並」 ・石山本願寺→1580年和睦 ・今井の経済力を借りようとした。 ・天下統一の拠点にしようとした。 ・武器の調達（鉄砲）ができる	・今井は「土民並になる」という条件で武装解除させられた上で「宗門相統」を許され、そのために最低限必要な坊舎再建・門徒の還住等が認められたことを理解させる。 ・今井を壊滅させるだけの力を持った織田信長が、今井の経済的利益に着目して降伏勧告したことを理解させる。	③0織田信長今井郷惣中宛書赦免状
歴史的評価 ・決断の結果、今井がどうなったかを確認する。 ・今井の決断について歴史的評価をする。 【歴史的評価】	◇その後、今井はどのような町になったのだろう。 ○今井の人々の決断は正しかったのか、歴史的評価をしてみよう。	・商業が発達した ・町屋が立ち並んでいた ① 正しかった ・町を守ることができた。 ・今井の商業はより一層発達した。 ② まちが良かった ・一向宗の団結は失われた。 ・豊かな経済力があるのだから、最後まで戦うべきだった。	→第3時で習得した知識 ・自らの決断と今井の決断を比較し、結果（史実）をふまえた上で評価シートにまとめさせる。	③1称念寺とその周辺（絵図） ③2「今井」評価シート

7. おわりに

過去と現在をつなぎ、生徒に歴史リバランスをもちつつ学習させるために、今回は富田林・今井の2つの寺内町の資料をもとにした。筆者が開発した社会科授業モデルにはまだまだ改善の余地は多いものと思われるものの、生徒に歴史学習をする意義・意味を考えさせる社会科教材を提供するという意味では一定の成果があったものと考ええる。今後は現場の中学校の社会科の先生方をお願いして授業をしていただき、検証結果をまとめるとともに、さらに学習指導案の加筆・修正を進めていきたい。

最後に、今後とも学校現場にいる多くの生徒たちが日々社会科学習をする意味・意義が感じられるように、社会諸科学の研究成果を授業に取り入れていきたい。また、筆者自身もさらに研鑽を積み、本学の学生とともに良い社会科授業モデルの開発・検証に努め、できるだけ多くの研究成果を学校現場に提案していきたいと考える。

注および参考文献

- (1) 文化庁によると、重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）とは、「昭和50年の文化財保護法」の改正によって伝統的建造物群保存地区の制度が発足し、城下町、宿場町、門前町など全国各地に残る歴史的な集落・町並みの保存が図られるようになっている。国は市町村の申し出を受けて、我が国にとって価値が高いと判断したものを重要伝統的建造物群保存地区として指定している。
- (2) 阿部貴弘、松江正彦、曾根直幸編（2013）歴史まちづくりの特性の見方・読み方、国総研究資料第723号、p.15
- (3) 2018年に改訂された高等学校学習指導要領解説（地理歴史編）・高等学校学習指導要領解説（公民編）は、従来までの小・中学校と分離したカリキュラムではなく、「社会的見方・考え方」に基づき小・中・高一貫したカリキュラムを取るよう工夫されている。
- (4) 2023年度の2月に開催された社会系教科教育学会（兵庫教育大学）では、「社会系教科カリキュラムにおけるレリバランス構築のあり方」がシンポジウムのテーマとなっており、社会科の授業改革において生徒が学習する意義・意味を重視する授業に取り組んでいる大学・高等学校・中学校の先生方が登壇し、議論を深めた。
- (5) 「レリバランス」という言葉は多義的であるが、ここでは端的に「子どもが学習する意義・意味」とする。近年、社会科教育研究者たちの間で、「レリバランス」が授業改革の視点として注目を集めている。
- (6) 第二次世界大戦後、日本に市民的資質育成の目的で設置されたのが新教科・社会科である。当時、学習指導要領には法的拘束力はなく、試案と位置付けられ、社会科教師に授業の裁量権が与えられていた。しかし、子どもの切実性を重視するあまり「はいまわる社会科」と揶揄され、その後の改訂時に学習指導要領は法的拘束力を持つこととなった。
- (7) 平川 南（2008）日本の原像 第2巻、小学館、はじめに
- (8) 岩田一彦（1994）「社会科授業研究の理論」、p.22
- (9) 二井正浩（2022）「レリバランスの視点からの歴史教育改革論」風間書房、はじめに
- (10) 有園正一・遠藤匡俊・小野寺 淳編著（2001）「歴史地理調査ハンドブック」古今書院、pp.1-2
- (11) 藤岡謙二郎（1998）寺内町の性格、大澤研一・仁木 宏編著、寺内町の研究Ⅰ（p.154）、法蔵館
- (12) 「由緒書」とは来歴を記したものである。したがって、堀新は「由緒書」について、近世に浄土真宗の側から都合よく書かれたものであるという批判を加えており、文献としての妥当性が研究者間で論議されている。
- (13) 現在、「明智光秀今井郷惣中宛書状」は奈良県橿原市今井町の称年寺に保存されている。その史料の中で、今井寺内町の自衛のためのまちづくりについて、詳細に特徴を述べている。
- (14) 鍛代敏雄（1998）畿内寺内町と一向一揆、寺内町の研究Ⅰ（p.267）
- (15) 鍛代、前掲書、p.289
- (16) 金井 年（2004）、「寺内町の歴史地理学的研究」のpp.65-71の内容を筆者が整理
- (17) 鍛代敏雄、前掲書、pp.268-271の内容を筆者が整理
- (18) 辻井清吾は以下の著書で、今井などの寺内町が経済発展した物流の拠点となっていることから「地域経済センター」と呼んでいる。
辻井清吾（2017）「信仰から見た寺内町」佛教経済研究 46, p.72

- (19) 鍛代, 前掲書, p.281
- (20) 本願寺による広域的な都市・流通支配の下, 戦国大名領国内を貫通する独自の「本願寺系交通路」が整備し, 寺内町間の交通は, 門徒衆ではない交通業者である「ワタリ」が担っていた。「ワタリ」は全国から畿内寺内町に入り込み, 階層もさまざまであったと言われている。
- (21) 堀 新 (1998) 織田権力の寺内町政策, 寺内町の研究Ⅰ (p.65), 法蔵館
- (22) 橋詰 茂 (1998) 寺内町今井について, 寺内町の研究Ⅲ (pp.183-184), 法蔵館
- (23) 辻井清吾 (2017) 前掲書, pp.95-96
- (24) 藤木久志 (1998) 統一政権の成立, 寺内町の研究Ⅰ (p.323), 法蔵館
- (25) 「大和軍記」は由緒書の1つであり, 大和武士の興亡, 特に筒井氏を中心に越智・古市・箸尾・十市氏などの盛衰を説いている史料である。当時の大和の様子をよく表していることから, あえてここでは採用した。
- (26) 「文禄4年検地帳」とは, 現在の奈良県橿原市今井町にある浄土真宗の称年寺に所蔵されていたもので, 今井寺内町の構造が丁寧に記載されている。ただし, この原本は現存せず, 当時の写しであり, 慶長12年3月の記載がある。
- (27) 橋詰, 前掲書, p.174
- (28) 橋詰, 前掲書, p.168
- (29) 橋詰, 前掲書, p.168
- (30) 堀, 前掲書, p.357
- (31) 「御制札」(表7)とは, 「大坂並」の寺内町特権を認めた歴代の制札のこと。この史料は「旧杉山家文書」の1つとして京都大学総合博物館に所蔵されている。
- (32) 中学校学習指導要領解説(社会編)の歴史的分野では, 絵図・地図・文献等を使用した社会科における技能の習得について明記している。
- (33) 岩田は社会諸科学の研究成果をもとにして, 概念探究型・価値分析型の社会科授業論を提唱している。当時, 奈良県教科等研究会社会科部会は岩田の理論に基づいて研究を進め, 学習指導案を設

計している。

- (34) この「研究構成図」は基調提案の冒頭に示されているもので, 奈良県教科等研究会社会科部会の研究の方向性を示したものである。
- (35) 「歴史的評価」については, 以下の小原友行の著書に詳しい。
小原友行 (1989), 「社会科教育の理論」, ぎょうせい
- (36) 「パフォーマンス評価」とは, 知識やスキルを使いこなす(活用・応用・統合する)ことを求めるような評価方法のことを指す。
- (37) 「寺内町の知識構造」は大澤研一・仁木 宏編著 (1998)「寺内町の研究」Ⅰ～Ⅲを主要参考文献として, 筆者が授業化するにあたり作成したものである。
- (38) 今回開発した社会科授業モデルは, 奈良教育大学附属中学校・丹後七重教諭が第15回近畿中学校社会科教育研究大会歴史的分野研究発表(2009)において示した社会科学学習指導案をもとに, 筆者が寺内町を軸に学習指導案を再構成し, 加筆・修正を加えたものである。

参考文献

- 文部科学省 (2018)「中学校学習指導要領解説 社会編」東洋館出版社
- 文部科学省 (2018)「高等学校学習指導要領解説 地理歴史編」東洋館出版社
- 文部科学省 (2018)「高等学校学習指導要領解説 公民編」東京書籍
- 大澤研一・仁木 宏編著 (1998)「寺内町の研究Ⅰ」法蔵館
- 大澤研一・仁木 宏編著 (1998)「寺内町の研究Ⅱ」法蔵館
- 大澤研一・仁木 宏編著 (1998)「寺内町の研究Ⅲ」法蔵館
- 金井 年 (2004)「歴史地理学的研究」和泉書院
- 二井正浩 (2022)「レリバンスの視点からの歴史教育改革論」風間書房
- 岩田一彦 (1994)「社会科授業研究の理論」

Creating Social Studies Classes that Make Students Think about the Value and Significance of History Learning: Through a Comparison of the Temple Towns of Imai and Tondabayashi

Noboru Nakatani

Social studies teachers have lacked the skill to offer students a clear answer to the question, “Why is it necessary to study history?” By and large, they merely feed students with the knowledge needed to pass exams and singlemindedly push them to memorize it. Out of alarm about this situation, the concept of “relevance” has drawn considerable interest in recent years in academic circles related to social studies education, and social studies class practices based on the concept have been reported. However, this research trend does not mean that it is a good idea to return to the early days of social studies, which were derided as “roundabout empiricism” for their emphasis on the keenness of children. Rather, the main focus is on getting students to think about the value and significance of history learning with an emphasis on the process of inquiry based on research findings in social sciences.

Therefore, drawing from the findings of historical geography research, this study looks at the two temple towns (*jinaimachi*) of Imai in Nara and Tondabayashi in Osaka, to determine the differences between the two towns in terms of landscape, development process, relationships with Hongan-ji distribution channels and Oda Nobunaga, and other factors. Through teaching materials about these temple towns, the study also aims to connect the past and present, and to encourage students to think about the value and significance of historical learning.

This paper also proposes a social studies class model that overcomes the limitations of social studies classes based on the current official “Course of Study” guidelines (Social Studies) by attempting a lesson structure in which students are set a performance task in the fourth period of the social studies class model and asked to make two value judgments.